カルメル修道会（エウジェニオ教皇によって改訂された）のカリスマと霊性

現在、カトリック教会の中で、二つのカルメル修道会が存在します。一つは日本に存在する跣足カルメル修道会であり、もう一つは日本に存在しないカルメル修道会です。

跣足カルメル修道会は、16 世紀のスペインにおいてカルメル修道会の中から神のインスピレーションを受けたイエスの聖テレサを通してはじめられた修道会であり、エルサレムの大司教アルベルトによって聖地カルメル山の隠修士に与えられ 1247 年にイノセント 4 世によって改訂された「原始会則」に基づく生活を選びとりました。

それに対して、カルメル修道会は 1432 年にエウジェニオ教皇によって改訂・緩和された会則に基づいた生活を選び取りました。イエスの聖テレサもアヴィラにありますカルメル修道会のエンカルナシオン修道院に入会し生活した聖人です。現在もこのカルメル修道会は存在し、カトリック教会と世界に奉仕していますので、跣足カルメル修道会の母修道会ともなります。

現在、カルメル修道会（これからは、O.Carm と明記する）は、第二バチカン公会議後、ご自身の修道会のカリスマのエッセンスを考察し続けてきました。その記事を参考に、カルメル修道会についての紹介をすることにします。

O.Carm のカリスマと霊性

カルメルのカリスマは、『カルメルの会則』の中に特有のキャラクターを持っています。それはキリストの福音に鼓舞されたカルメル会の師父たちの体験によるものです。そのため、すべてのカルメル・ファミリーにとって、第一のドキュメントとなります。会則を知り深めることは、教会の中での自身のアイデンティティを理解することになります。そのために、ある一人の創立者だけの生活や霊性に頼ることはありません。

カリスマと会則はお互いに補い合います。しかし同一視することはできません。会則はカリスマの要素を含んだ第一の源泉ですが、この遺産は前もって原泉から作られたことを考慮しなければなりません。会則は神から受け取ったカリスマを生活に当てはめたところから生まれました。大司教アルベルトが与えた会則がそれです。その後に、イノセント 4 世によって改訂され（1247）、全教

会に認められる修道会となります。その会則の基礎は、「イエス・キリストに従って生き、清い心と善い良心をもって奉仕する」ことです。

最初のカルメル会士の意向は、聖霊の下で会則の中にこの精神を探究して生きました。それゆえ、わたしたちカルメル会士たちも、アイデンティティの探究のための貴重な宝と見ています。

カルメル修道生活に由来する霊性に関しては、最初から二つの卓越した霊性が脈打っていました。それはエリヤの霊性と聖母マリアの霊性です。この二人に対する言及は会則の中にはありませんが、イエス・キリストに従い福音に捧げるときにこの二人の霊性がカルメル会士の心に燃え立っていました。この二人の霊性は最初のカルメル会士から始めて現在に至るまで、多くのカルメル会士たちに受け継がれたものです。

現在の O.Carm のカリスマの表明は、「観想生活」の要素を持っている修道会であるということです。歴史を通しての相次ぐ改革がこの要素を混乱の中に陥らせてしまいましたが、現在に至っては、観想生活のカリスマの概念を明確化したといえるでしょう。そこに至った原因は、第二バチカン公会議の「源泉に立ち戻る」ということにあります。この結果、次の言葉がモットーとなりました。

「人々の中にある祈りの兄弟性」または、「人々の中にあって、人々に奉仕する観想共同体」

現在の O.Carm の観想の価値は、預言的視点をもってグローバル化された世界と苦しみを持つ世界に向けています。観想とは主イエス・キリストを探究して出会い、彼の御言葉を聴き、彼の御心を識別し、彼の視点で物事を見渡すことです。観想的次元で成長することは、聖霊の導きと働きによって、キリスト化されることです。それはキリストが死と復活を通して歩まれた「過ぎ越し」の道であり、神の救いのご計画の中で、キリストの協力者に変容されることです。

観想は、カルメルのカリスマの心であり、この観想生活の中に、祈り、兄弟・姉妹性、奉仕が含まれています。この観想生活の目指すものは、神の愛の充満に至ることです。そのため、キリストのうちに聖霊の働きによって漸進的に継続的に変容される道でもあります。神は外界に散漫的な心になっているわたしたちを内的世界に導き、そこに住む神の像と似姿をもつキリストに一致させて、

新しい人間を形成させることに導きます。

カルメルのカリスマの中で、常に観想と祈りは同一視されてきましたが、分けて見ることも大切です。それは観想の入り口としての祈りとも言い表すことができるでしょう。観想は祈りを包含するものですし、キリストと共に古い人間性を捨て去り、新しい人間性に選び取っていきながら変容されるものだからです。

カルメルのカリスマの中心となる観想生活の言及は、会則の NO.10 にあります「各自は昼も夜も、主の掟を黙想し、かつ祈りのうちに目覚めて、他にしなければならないことが無い限り、自分の修室の中か、あるいはその近く独りでいなくてはならない」とありますが、観想生活は和解の生活を大切にします。そのため、観想生活は兄弟的生活をも大切にします。それだけでなく、カルメル的観想生活は、人々の中にあって、人々への奉仕をしますので、使徒的奉仕職を含みます。

すなわち、カルメルのカリスマの定義は観想生活ですが、観想生活の中に祈りの生活、兄弟的生活、使徒的奉仕生活を含んでいます。

≪以上は O.Carm の記事を要約≫

文責　松田浩一　OCD